科学哲学 37-2（2004）

時制的変化は定義可能か
——マクタガートの洞察と失敗——

青山拓央

Abstract

McTaggart has an insight that changes of *property* rely on changes of *tense* (McTaggart 1908). As I show in this paper, he fails to define A-series as a series for changes of tense, and therefore his proof for the unreality of time is unsuccessful. A-series found in the proof is reduced to a number of mere indexicals of time, and this reduction is pushed forward in Dummett's defense. My aim in this paper is not only to check the validity of their arguments but to investigate invincible difficulties faced in defining changes of tense. The latter is my main aim, and the former is a preliminary argument for it.

「時間の非実在性」(McTaggart 1908, 以下「UT」) においてマクタガートが洞察したのは，性質的変化の前提としての時制的変化の存在であった[1]．だが本稿でみるように，彼はA系列を時制的変化のための系列として定義することに失敗している．UT後半部の証明が破綻しているのもそのためであり，そこでのA系列は変化とは無縁な，単なる時間的指標子（A規定）に成り下がっている．この問題の変質は，ダメットの擁護的議論によってさらに強化されることとなり，今日もなおその影響は色濃い[2]．

本稿の中心的課題は，マクタガートの証明およびダメットによる擁護論の妥当性の検討にあるのではない．問題の核心は，時制的変化の定義に潜む克服しがたい困難にある．マクタガートに由来する時間の実在性の検討において，この定義が十全に行われた例は見当たらない[3]．形式化された議論の多くは，先後関係にA規定を追加すべきかを争点にしており，ダメット的な問い

の変質を経ている．本稿の議論の焦点はその理由の解明にあり，マクタガートらの検討はそのための手がかりに用いられている．

1

始めにUTの概略を述べよう．マクタガートは前半部において，二つの時間系列を区別している．「遠い過去から近い過去を経て現在に至り，さらに現在から近い未来へ，そして遠い未来へと及ぶ位置の系列」をA系列と呼ぶのに対し，「より以前からより以後へと及ぶ位置の系列」をB系列と呼ぶ（UT, p. 458）．マクタガートは二つの系列を次のように評価する．——B系列において出来事Mが出来事Nの以前であれば，その関係は永続的に変わらない．ここでは時間の実在にとって本質的な変化が扱われていない．一方A系列においては，B系列では扱い得ない真の変化が捉えられる．それゆえ時間の実在にとってA系列は不可欠である——．

マクタガートのいう真の変化とは何か．多くの解説では，それが対象の性質的変化ではないという点が強調される．たとえば時刻t_1から時刻t_2にかけてのさなぎから蝶への変化は，真の変化ではないといった具合に（t_2はt_1の以後とする）．空間的移動もまた，空間的位置という性質の変化だといえるため，真の変化とはみなされない．

だがこうした解説には不足がある．その不足について述べる前に，UTから真の変化について語っている箇所を引用しよう．マクタガートはアン女王の死という出来事を例に，それを次のように表現する．

> それが死であること，それがアン・スチュアートの死であること，それには一定の原因があること，それには一定の結果があること，このようなどの特性も決して変化しない．［中略］しかしただ一つの点で，その出来事はまさに変化する．その出来事は，未来の出来事であることで始まり，刻一刻とより近い未来の出来事となり，とうとう現在となる．それから過去になり，刻一刻とだんだん遠い過去となるが，常に過去のままであり続ける（UT, p. 460）．

この表現の有意味性は，本稿の後半で検討される．しかしここでは暫定的にこの表現を受け入れたうえで，そこで語られた「真の変化」を時制的変化と呼ぶことにしよう．性質的変化と時制的変化の違いはどのようなものだろうか．性質的変化の担い手は，異なる複数の時点において異なる性質を所有する（t_1においてさなぎであり，t_2において蝶であるというように）．一方，

時制的変化の担い手は常に同一の時点（瞬間的である必要はない）に位置する．

時制的変化は性質的変化と異なる．そして前者はA系列の存在なしには不可能である．このことから多くの論者が，前者をA系列，後者をB系列と結び付けてきた．しかしマクタガートの主張の真意は，B系列ではいかなる意味でも変化を扱えないという点にある．それゆえ性質的変化とB系列とを安易に結び付けてはならない．

確かにB系列は，時刻t_1において「さなぎである」対象xが時刻t_2において「蝶である」といった事態の描写を可能にする．だがB系列では，さなぎが蝶に「なる」といった事態を描写することができない．さなぎが蝶に「なる」ためには，変化の二つの段階の間に時間の流れが必要とされるが，マクタガートはこうした動性をA系列の側に押しやったためだ．性質的変化はこの意味で時制的変化を含んでおり，B系列の力のみでは描写不可能となるのである（性質的変化の描写における「なる」が果たす役割については，4節後半で再考する）．

これに対し，時制的変化をA系列と結び付けて理解する態度は，マクタガート自身によるものである．次節以降の議論で私はこの結合の失敗を示すが，現段階ではここに問題が残されていることのみを指摘しておこう．

それでは後半部の議論に移ろう．そこでは次の証明が展開される――．「過去」「現在」「未来」は互いに両立不可能な規定であるが，いかなる出来事もそのすべてをもつのでなければならない．マクタガートはここにA系列の矛盾を見出し，時間の実在にとって不可欠なA系列が矛盾することから，時間の非実在を導こうとする[4]．

しかしこの議論に対し，「未来であった」「現在である」「過去になるだろう」という三つの述語ならば，矛盾なく両立可能であると考えてはなぜいけないのか．マクタガートはこう答える．――それらの述語を「過去において未来である」「現在において現在である」「未来において過去である」のように書き換えるなら，A系列の説明に，高次のA系列を用いていることが明らかとなる．だが新たなA系列においても同様の矛盾が生み出されるため（「未来において未来である」と「過去において過去である」の両立不可能性のような），その説明は悪循環に陥る――．

このマクタガートの応答は独特の魅力をもっており，様々な議論を喚起してきた．一般にUTの解説はこの箇所までをひとつながりに扱う．本稿でもここでひとまず解説を終えることにしよう．

2

後半部の証明は指標子一般にあてはまるようにみえる．たとえばこの論文の著者は「私」でありかつ「彼」でもあるが，「私」と「彼」はお互いに排他的な規定だといえるからだ．だがこのことを矛盾と呼ぶなら，空間や人間の実在性もまた否定されることになる．これはマクタガート自身にとっても，受け容れがたい結論である．

ダメットはこの難点に対し，後半部が前半部に依存することを強調した（Dummett 1960）．彼の表現を用いるなら，「前半部の類比が空間や人間に関して成り立たない」（ibid., p. 500）ために，後半部の証明を空間や人間に当てはめるのは不可能とされる．

しかしここでわれわれは，容易に納得してはならない．前半部の議論におけるA系列の描写に際して，「なる」や「あり続ける」といった語が活躍していたことを思い出そう．マクタガートはこれらの語彙で，変化の動的な性格を語ろうとしている．疑いなくマクタガートにとってこうした時間の動性は，A系列の主要な特性であった．

だが後半部の証明で扱われているA系列は，こうした時間の動性を完全に失っている．それは「過去」「現在」「未来」という両立不可能な規定同士の静的な関係で表されている．すなわちここでのA系列は，「ここ」と「向こう」の関係や，「私」と「彼」の関係とパラレルなものとして扱われている．今後，「現在」との関係を表す時間的指示語一般を，A規定と呼ぶことにしよう．重要なのは，A規定に含まれる語（「過去」「現在」「明日」「今年」等）そのものには，変化が含まれていない点だ．

マクタガートの擁護者は，次のように反論するだろう．——A規定の相互排他性は，確かに形式化してしまえば，空間や人間の指標子がもつ静的な相互排他性（すなわち非時間的な相互排他性）と区別がつかない．だが前者の相互排他性には，指標子の特性のみによらない時間の動性が含まれている．マクタガートの議論の意味を真に理解するためには，この動性への洞察を証明に読み込まなければならない——．ダメットの語る「前半部への依存」もこの反論を支持するものである．

しかしこの反論は，マクタガートの証明自体を不可解なものに変えてしまう．もし上記の反論の通り，A規定は他の指標子と異なる動的な相互排他性をもつのだとしよう．マクタガートも前半部においては，そのようなものとしてA系列を論じた．ところがこの主張を認めるなら，後半部の証明は空虚となる．「同一の出来事がA規定のすべてをもつ」ことは，動的な相互排他性

の承認において，既に許可されているのだから．

この点に注目すると，UTの議論全体の奇妙な構造が明らかとなる．A系列を否定するには，A系列とは何のことかを読者は理解しなければならない．ところがそれを理解するには，マクタガートのいうA系列の矛盾が既に解消していることが要求される．すなわち同一の出来事がその同一性を保持したままA規定のすべてと結びつくこと，それも時間の動性に基づく特殊な仕方で結びつくこと，このことが知られているのでなければ，そもそもマクタガートは一切の議論を始めることさえできなかった．だがそのことが知られているなら，後半部の証明はまったく意味をなさない．

マクタガートにとって都合がよいのは，前半部から時間の動性を読み取り，時制概念が他の指標子とは異なることを理解した後，時制概念は別格であるとの印象のみを残したまま，そこでの議論を忘れることである．指標子一般にあてはまる後半部の証明をそれ以上のものにみせているのは，この印象に他ならない．恐るべきことに無数の読者がこの印象にだまされてきた．おそらくはマクタガート自身もまた．

こうしてわれわれは次の結論に到達する．UTは仮に何らかの証明に成功しているとしても，時制的変化の不可能性を証明することには失敗している．だがマクタガートにとって時間の非実在性の証明とは，まさにこのことであったはずなのだ．私にはこの結論があまりにも明白なものに思える．にもかかわらずこの結論は広く受け容れられてはいない（マクタガートの証明を詭弁とみなす議論は多いが，上述したUTの構造はほとんど注目されていない）．おそらくその最大の理由は，この結論を見えづらくさせる特殊な問題の混在による．次節ではその問題をダメットの議論から取り出してみよう．

3

ダメットはUTの前半部から，次のテーゼを抽出する．「時間において存在するものは状況依存的な表現なくしては完全に描写し得ない」(ibid., p. 502)．このテーゼは，「実在とはそれについて完全な描写が原理上存在するところのものでなければならぬ」(ibid., p. 503) という別のテーゼと組み合わさることで時間の実在性を脅かす．そこでダメットは第一のテーゼ（時間的描写の状況依存性）を維持するために，第二のテーゼ（実在の描写の完全性）を放棄する道を示唆する．

ここで興味深いのは，ダメットが描写の状況依存性に注目していることである．彼の考えをまとめてみよう――．実在を描写する上で誰が「私」であり，どこが「ここ」であるかを知る必要はない．これらの表現は状況依存的

であり，実在の描写ではないからだ（このとき「私」はその語の使用者を指し，「ここ」はその語の使用場所を指す）．ところが「現在」はこの点において，「私」や「ここ」とは異なっている．宇宙に起こるすべての出来事を知っている人物がいたとしても，彼のその知識だけでは実在の描写は満たされない．「彼は出来事の系列の完全な物語を与えることはできる．しかし，それでもなお『それらの出来事のどれが今起きているのか』という問いに答えることが残されるだろう」（ibid., p. 501 傍点引用者）

ここでダメットがみているものは，A規定（とりわけ「現在」）の実在性をめぐる問いである．実在の世界を描写するのにA規定が不可欠だとするなら，ある出来事が「現在であり」かつ「現在でない」ことは深刻な矛盾を生むだろう．このときUTの証明は，実在の描写が排中律を破るという厄介な事態を扱っている．

だがダメットのこうした議論は，マクタガートの擁護となり得ているのか．ここには大きな疑問がある．ダメットはUTの証明と同様，時制的変化の問題を扱えてはいないからだ．ある出来事が現在から現在でない状態(過去)に「なる」のはいかにしてか，という時制的変化を含んだ問いは，ある出来事が「現在であり」かつ「現在でない」ことはなぜ可能か，という問いの枠組みをはみ出している．

ダメットは確かに両者の問いに関連があるべきだと考えており，そのことを「後半部の前半部への依存」というかたちで述べた．だがその依存の実体について，彼はアナロジーしか述べていない（本稿の結論が正しいとするなら，彼にはそれしかできなかった）．それゆえダメットの問いとしてわれわれに明瞭に受け継がれたのは，A規定の実在性の問いとなった．ここには時間の動性や，系列性はもはや関わっていない．

以上の問いの単純化は，UT後半部の証明を擁護するうえでは有効であった．A規定の実在性に注目するなら，時間の動性を失った証明のなかにも，時制の特権性を見出せるからだ．もし「現在である」ことが実在のあり方に関わるとするなら，前節でみた結論の明言は躊躇されるだろう．

改めて確認しておくなら，ダメットはUTの証明から改めて時制的変化を奪ったのではない．それは既に損なわれていたのであり，それゆえ証明は失敗していた．ダメットが着手したのは，時制的変化の欠落を実在性への言及によって補い，証明を擁護する試みである．

この試みそのものは広い射程をもっており，独自に検討する価値がある．だがUT全体の擁護という観点に立つならば，議論はすれ違っているといわざるを得ない．なぜならA規定を他の指標子から特権化するためにダメット

が依拠しているのは，時制の特別な実在性への直観に他ならないのだが，これこそUTが最終的に否定する事柄であるからだ．

ダメットのこの混乱は，彼の結論によって整理される．ダメットは時間の非実在性ではなく実在の描写の不完全性を，より重要な結論とみなすのである．しかしこの結論に至る論証が，A規定の実在性を前提としてなされていることに注意するなら，ダメットの狙いが始めからマクタガート擁護とは異なる点に向けられていたことが分かるだろう．

4

UTには少なくとも二つの論点が含まれており，ダメットはその一方（A規定の実在性の問い）を救い出す過程において，他方（時制的変化の問い）を隠蔽してしまった．ダメットが後の議論に与えた影響は大きく，この隠蔽は今日もなお続いている．だが本稿で見出されたのはUTが同種の隠蔽を暗黙のうちに実行しており，その隠蔽が後半部の証明を支えているという事実であった．

しかしながらこの隠蔽は，UTにただ有利には働かない．むしろそれはUTの失敗を決定付けている．UT全体の根幹をなす時間系列の分離において，この隠蔽は既に始まっており，時制的変化とA系列との結合は果たされないからだ．

A系列に向けられる典型的な批判をもとに，この失敗の背景を探ろう．マクタガートはA系列の描写に，時制の遠近を持ち込んでいた．たとえば「より近い未来」といった表現を彼は用いたのである．多くの論者がこの点に対し，B系列の介在を指摘した．マクタガートによるA系列の定義は，「以前—以後」の時間系列に依存しているというわけだ．

この批判を回避するため，系列性に触れないかたちでA系列を扱えるだろうか．ダメットが手がけたのは，その試みの一例であった．A規定の実在性に注目するなら，系列性はとりあえず不要となる．だがマクタガートにはどうしても，A系列を「系列」として提出する必要があった．

問題は，われわれの言語のなかに時制的変化を表す語彙が存在しないという点にある（それは日常言語に限らない）．言語は貫時制的な同一性と，時制表現とを併せ持つが，この両者の関係を動的に語る能力をもたない[5]．われわれは確かに，「pである」という事態が「p」の同一性を損なうことなく，「pであった」へと推移することを知っている．だがこの推移の正体を，「p」や時制表現を用いて改めて説明することはできない．われわれは二つの命題がともに真となり得ることを，現実の時制的変化を通して知るのであり，そし

てそのことによって初めて貫時制的な同一性を理解する．

変化を語る記述自体は決して変化を被らない――，これは自明な事実であるが，しかしこの自明さのなかにわれわれの問題の核心がある．すなわち記述の永続性と，変化の動性との不和である．永続的な記述のなかに時制的表現（たとえばA規定）を導入しても，その時制的表現間の変化が表されることはない．われわれの手持ちの言語において的確に表現可能なのは，異なる時点間の対象の差異，つまり性質的変化に限られる．

そのため時制的変化の描写は，性質的変化のアナロジーの力に依存せざるを得ない．A規定間の変化は，性質間の変化と同種の描写をもって語られるのである．とりわけ遠近に関する語彙は，運動の描写のアナロジーとして時制的変化をうまく捉える（遠くから「現在」に近づき，また「現在」から遠ざかるといった）．このことがマクタガートに系列的な語彙の使用を強いた．彼にとってのA系列とは，時制的変化の舞台なのである．

ところがこうしたアナロジーには決定的な難点がある．性質的変化は時制的変化を理解の背景として要求するため（単に「さなぎが蝶になる」と述べるだけで，われわれは時制的変化をも理解している），アナロジーであるはずの描写が，そこで伝わるべき直観をあらかじめ語ってしまうのである．

「ある同一の出来事が現在から過去になる」という記述は，まさしくこうしたアナロジーの一種だ．この記述の奇妙さは「なる」の一語に潜んでいる．この一語を理解するには，移行する「現在」や「過去」を越えた高次の時制を捉えねばならない．性質的変化の語彙を用いて時制的変化のみを取り出そうとするとき，変化する時制と変化させる時制は分裂を免れないのである．

同じことを次のように言い替えてもよい．性質的変化のアナロジーによる時制的変化の描写は，「過去」「現在」「未来」といったA規定をあたかも性質のように扱ってしまう．ところが性質化されたA規定は，その性質間の変化を自らの力によっては描写できない．

「なる」や「変わる」といった動的な述語は，性質化された時制間の変化を一見描写可能にする．だがこうした動的な述語はそれ自体が時制的変化を表現しており，そこに読み取られるA規定はもはや性質的なものではない．もしその次元でのA規定をも性質化しようと試みるなら，さらなる高次の動的な述語が要求されるだろう．ここにはマクタガートが提出した悪循環を導く議論が，より本質的なかたちで再現している．

一般に「アン女王の死が過去になる」といった文が自然であるように思われるのは，われわれが何らかの性質的変化を同時に理解しているためである．現在としての女王の死と過去としての女王の死はまったく同じ時点に位置す

るため，時間系列を眺望した地点から「さなぎが蝶になる」と述べるように，「現在としてのアン女王の死が過去としてのそれになる」と述べることはできない．だが現在と過去の違いを何らかの性質の違い(たとえば知覚と記憶)に矮小化するなら，二つの時点を比較して変化を語ることが可能となる．時制的変化を表した文は，こうした矮小化を背後で行う．

誤解を招いてはいけないのだが，私は性質的変化のみが存在し，時制的変化は存在しないと述べているわけではない．むしろ繰り返し述べた通り，時制的変化の存在なしには性質的変化は存在し得ない．だが言語との関係において両者の立場は逆転する．記述の可能性に注目するなら，性質的変化に依存しない時制的変化はあり得ないのである．

5

A系列の提出におけるマクタガートの失敗は，性質的変化のアナロジーがもつ限界を意識しないまま，そのアナロジーの語彙を用いて定義を試みた点にある[6]．彼はその目的のために，時制的変化にとって不要なものをB系列の側へと押しやったのだが，そのことがUTの議論をさらに不必要に混乱させた．A系列の描写の困難がちょうど反転したかたちで，B系列の描写においても再現されてしまったからだ．

その事実は次の箇所でも確認することができる．マクタガートはA系列の描写に「過去—未来」の向きを用い，B系列の描写に「以前—以後」の向きを用いたが，この二つの時間的向きは正反対の要求を突きつけられる．すなわち，「過去—未来」には系列性に依存せずに時制的変化を扱うことが要求されるのに対して，「以前—以後」には時制的変化に依存せずに系列性を扱うことが要求されるのだ．マクタガートの狙いからいって，この二つの時間的向きは「同じ一つの時間」に属するものでなければならない．だが正反対の要求を突きつけられながら，いかにしてそれは可能となるのか．

この疑問はしばしば，二通りの反応を惹き起こした．「過去—未来」への要求が満たされない点を強調するなら，A系列はB系列に依存するとの結論が得られる．一方，「以前—以後」への要求が満たされない点を強調するなら，B系列はA系列に依存することになる（UTの議論は後者である[7]）．

一見，この二つの立場は衝突するもののように思われるため，近年の時間論においては，どちらの立場が優位かをめぐって対立する風潮がある[8]．いわゆるA論者が，B系列のA系列への依存を主張するのに対し，B論者はA系列のB系列への依存，あるいはA規定の不要性を主張する．

だがいまやわれわれは，それとは別の角度からこの対立を捉えることがで

きる．問題の核心は時制的変化と言語の不和にあり，それを取り出すにせよ，消し去るにせよ，時制的変化を単独で扱おうとする試みは何らかの失敗に陥るのである．A系列を時制的変化と一体化させるマクタガートの狙いは，まさにこの失敗と不可分であり，破綻を宿命付けられている．

ところがこの破綻を認めず，系列の分離に固執することで，マクタガートは時制的変化への洞察を自ら隠蔽してしまった．彼は時制的変化の描写を用いたA系列の定義を目指したのだが，その試みが頓挫した後には，状況依存的な時間表現（すなわちA規定）をA系列と同一視したのである[9]．後半部の証明への移行は，まさにこの同一視に基づく．

だがこの時点でマクタガートが，ダメット的な問いの変質への一歩を踏み出していることは明らかであろう．確かに時制的変化の描写には，状況依存的な記述（A規定を用いた記述）が入り込んでくる．ダメットはこの点に注目し，状況依存的な記述と実在性との関係を論じた．しかしマクタガートの洞察の先には，ダメットの問いの発信の根拠，すなわち時制的変化がある．ダメットの問いが有効に機能するのは，描写の依存する状況こそが時制的変化の渦中にあるからに他ならない．この関係を逆に捉えて，状況依存的な記述の側から時制的変化を定義するのは倒錯した試みなのである．

6

性質的変化の背景に時制的変化を見出すこと――，これこそがUTにおけるマクタガートの洞察であった．だがUTが今日もなお著名な論文であり続けている理由は，この洞察への共感以上に，新奇な時間系列の分離と逆説的な証明の魅力にある．

このこと自体は当然ながらUTの価値を貶めはしない．だが問題はこの二つの魅力が，時制的変化への洞察からわれわれの目をそらすという事実にある．もう一度，そのことを確認しよう．A系列とB系列の分離はマクタガートの意図に反して，時制的変化の有無の差を表現することに失敗している．UTの議論の進行とともにA系列はA規定に近づき，時間の動性は失われていく．その結果として得られるものこそ，後半部の証明に他ならない．

それゆえ時制的変化への洞察を真に吟味しようとする者は，UTの時間系列の分離や時間の非実在性の証明から，距離を保つ必要がある．それらは独立の議論として不十分であるという以上に，ダメット的な問いの変質を読者に促してしまうからだ．この意味で，マクタガートの洞察を伝える最大の障壁となっているのは彼自身の議論なのであり，彼をめぐる混乱の多くは彼の内部での混乱に過ぎない．

注

1. マクタガートにはこの他にも，同じ証明を扱った議論が存在する（McTaggart 1927）．だがその議論は基本的にUTを圧縮したものであり，大部の著作の一章として書かれたものであるため，本稿では一貫してUTのみに検討を加えた．
2. 代表的な論者にはメラーがいる．メラーがダメットから受け継いだのは，A規定を用いてUTを再定式化する点，およびその再定式化が実在の記述の真理値評価に関わっている点である（たとえばMellor 1998）．本稿3節で述べるようにこうした再定式化は注目に値するが，UTの本来の狙いを十分に捉えたものではない．同種の問いの変質は，Lowe（1992）とPoidevin（1993）の間に交わされた論争のなかにもみることができる．
3. 時制論理は「現在」を真理値評価の基点として固定化するため，動的なA系列を表せないとの中山に指摘に私は同意する（中山 2003, pp. 106-9）．ところで中山は同著のなかで，A系列に類する印象構造を詳細に形式化しているが，その箇所における次の記述は大変誠実なものに思える．「形式的記述は，元来，静的なもので時間の動性を完全に描くことはできない．しかし，それでも，時間の動性が描き出す痕跡の方は，形式的記述により，完璧に描くことができるのである．私たちは，これを形式的記述の限界として受け入れなければならない」（ibid., p. 149）．本稿の目的は，まさにこの限界の探求にある．
4. 入不二が指摘するように，マクタガートはこの箇所で「矛盾するものは実在し得ない」との隠れた前提を持ち込んでいる（入不二 2002, pp. 61-4）．同著において入不二は，A論者対B論者の枠組みを離れたマクタガート論を展開しており，海外の研究に捉われない独自の考察をなし得ている．最終章の議論には未消化な論点もふくまれているが，それは今後の課題であろう．
5. クリプキ型の「グルー」（オリジナルのグッドマンとは異なり，「青」と「緑」の変換が時刻的にではなく時制的になされる）に類する時制依存的な概念の不在は，このことを裏付けるものである．すなわち時制表現は，貫時制的な言語に後から付け加えられたものではなく，両者は相補的に言語を支える．そのとき言語がこのようにある理由は，言語を生み出した言語外の事実に求められることになろう（青山 2002, pp. 230-4）．
6. UTの論法をまず受け容れ，そこから破綻を取り出すというのが本稿の議論の構成であった．それゆえ本稿はUTと同様の危険をおかしている．すなわち時制的変化単独での描写の困難に関する批判は，そのまま本稿自身へと帰って来ることになるのである．しかしながらこの危険をおかすことなく，マクタガートの論点を伝達することは不可能であろう．重要なのはそこで用いられるアナロジーの限界を常に意識することなのである．
7. 時間の非実在性の証明には不要であると断った上で，マクタガートは次の主張を行う――．B系列上の「以前―以後」は，単なる順序関係（たとえば数直線上の大小関係）ではなく時間的な向きを表しているが，このような向きを理解するに

はA系列の介在が不可欠である．それゆえ「以前—以後」の向きは，特定の向きをもたない線形系列（マクタガートはそれをC系列と呼ぶ）に，A系列が加わることで初めて確保されるのである（UT, pp. 461-4）.

8. 信頼に足るアンソロジーとしては，*The New Theory of Time*, edited by L. N. Oaklander and Q. Smith, 1994, Yale UPがある（マクタガートやプライアーに依拠する30本以上の論文が読める）.

9. UT前半部の中盤以降で，この同一視は深まっていく．とりわけ特徴的なのは，A性質（A-characteristics）に言及する箇所（ibid., pp. 460-1），およびA系列における区別（distinctions）の本質性を語る箇所（ibid., p. 464）である.

* 本稿は，日本科学哲学会・第36回大会発表原稿「マクタガートの洞察と失敗」を改訂したものである.

参考文献

青山拓央 2002，『タイムトラベルの哲学』，講談社.

Dummett, M. 1960, "A Defence of McTaggart's Proof of the Unreality of Time", Philosophical Review, 69, pp. 497-504.（「マクタガートの時間の非実在性証明を擁護して」藤田晋吾訳，『真理という謎』，1986, pp. 370-81，勁草書房）

入不二基義 2002，『時間は実在するか』，講談社.

Lowe, E.J. 1992, "McTaggart's Paradox Revisited", Mind, 101, pp. 323-6.

McTaggart, J.M.E. 1908, "The Unreality of Time", Mind, 17, pp. 457-74.

McTaggart, J.M.E. 1927, "Chapter 33: Time", *The Nature of Existence vol. 2*, Cambridge UP.

Mellor, D.H. 1998, *Real Time II*, Cambridge UP.

中山康雄 2003，『時間論の構築』，勁草書房.

Poidevin, R.R. 1993, "Lowe on McTaggart", Mind, 102, pp. 163-70.

（千葉大学大学院・日本学術振興会特別研究員）